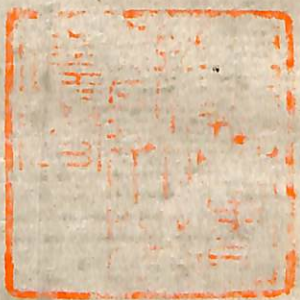


俳論

911.3
八
上

上

凡古來作史者莫無不可
 本也端大也則法以經尚
 依者社事平曰主己本
 多事公事在左國史傳和
 本紀古事本紀古事多采
 史之志者有之左史右史
 世所傳以文會之入之
 名實從法自矣子其采以
 代其後及



之部割場後人傳教建基心生日康
 其心波之及柳原院上載者元治院年
 之技師來評語論乃小冊以之柳原院年
 而之乃元來事為切為世人之志其來教
 之自前死既十教歲世而乃之之自矣
 既乃昆志播以述之圖知源十體大之依
 曉公未中在臨語取場其伊那志其
 之舟古之乃之此系經之古以之後之也
 送者及乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 難十其往之至全詩既中者後之乃其乃
 其乃中以其乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 道通惟其乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

實政十三年庚申夏四月

年之... 平... 淡... 居士書



Faded vertical text in the background, possibly bleed-through or ghosting from the reverse side.

若... 為人... 古人... 風骨... 十年... 古人...

梓のささの深志の雷尔
想くしき中をえりし序
又古人をおもふ



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '詩論序'.

の中首乃古今の誰認奇し中心
これれや可謂神代の能優
儂古も新幕のほを運て此一
大割場四将乃造化の大割を
しうはまのあふん流流を
海割初段をなげんやなるは
且魁方しりしはなはな

著るに時ありて後人彼のいふことと違ひて
 初らの筆も書違ひて居りて故に時代流の
 意にさしゝ叙し福成を以て撫と撰する方
 なくして見よとていふに似たりとて其の
 古人の糟粕を以てその味を察するに等し
 けりと糟粕を以てんは是れ其の境もさるる
 か多し一筆を以てたせしもの確白を以
 昔明和元年甲申年秋八月癸酉

詳論凡例

- 一 雑語より古申古近世々の内総論を以て古を以て代
 と稱し地よりて字根守式字源を以て記
- 一 貞徳より垂今を以て自ら室を以て古れと稱し次より室
 園の極極れを以てて是を以て古れの内と守字園と
 世を以てて古世世を以てて古れの内と守字園と
 古れを以てて古世
- 一 昔意を以て滅後門人の申すことありては伊丹
 伴紫の長徳善く一丸流とありては徳流の中兼初ありて
 流くハ丸流を以てて一流と稱し其の初流を以てて古す

次之誹諧侯と号し古人の令をよみて詠服の至
をき聯終と次より多事なるをよみ及ひて古人の教
句をよみ季混雜なるをよみ附とをよむ句の作古時代の
るるふたつと云ふ

誹論凡例終

誹論目錄

總論

上代風

宗祇

守武

宗鑑

古風

貞徳流

季吟

維舟

貞室

立甫

西武

梅盛

松堅

檀林風

宗因流

西鶴

正風

芭蕉流

其角

嵐雪

江戸風

其角流

不角

伊丹風

鬼貫流

伊勢風

乙由流

美濃風

支考流

半時菴風

淡々流

附羅人

誹諧談

附古人發句

附錄

新古の発句を混雜し四季を分る記を

誹論目錄終

誹論卷之一

總論

平安 秋月下白露編輯

夫誹諧ハ我朝の風物なり人皇六十代醍醐天皇の
 勅をもちりて紀西之古今和歌集に撰りて
 ようむと川の流とそなきりり後代への撰集
 にも入るるもそのまじりたる一首をよ句
 下句とするもそのまじりたる一首をよ句
 おれしとす

奥山は新古今おとの夢ゆき

たれらるるのこころをいふ人

人皇六十二代村上元皇御宇

小倉多岐子今八幡宮と成り

と作らば色ハ赤かよさむゆゑ野内宿とあり

夢又あふへそくやあらん

と付たり

人皇七十三代堀河院御宇

夢のこころはあつゝ人の心

とのまゝに中納言國信郷多うりてせむいそ

後醍醐又付とせむいそとあり

とさあふいよさあふい

とはうまうのいそと古記よそとあり

句の紀原よわあふい

人皇七十又代崇徳院御宇

あふいそあふいそあふいそあふいそ

た系たふたうとあり

あふいそあふいそあふいそ

とありと崇徳院御宇

らくまの神のたれたれと

とけりてのりて

後かゝるる事は致さゆへとて

あそまらぬの丸をさすらん

西行法師

世の中ハちん丸よこそそそえよらん

西行法師

あそあもあも福はるぬよ

人皇八十一代安徳天皇の御宇に福系の子に有る
はるなりたるに登蓮法師文を抄く御巻のあそ
を抄りたるに

和歌大正平法盛云

あそはるるはるのりて

登蓮法師

大さるるはるる許よあはるる

人皇八十二代後醍醐天皇御宇建文元年に源朝太郎
種実より上洛しついでに時康名の橋の石より
酒をこぼれしるる

和歌大正平法盛

橋本のいさむらを何うりて

平景時

きく松らのくまきこあきさ
はとこうたてゆのかくはくしん

從二位家隆郷

もあまももすくもあきさ
しりの屋敷のくまきこあきさ

前中納言定家郷

大むけの御車さきくしんあみ

さきさきくしんあみ

皇太后宮大主後成女

ほしあきさきくしんあみ

とり大のちきさのあきさ

待賢門院堀川

丁よあきらのあきさ

前大納言為家郷

かきくあきとあきさ

安土門院日奈

あきさあきさあきさ

あきさあきさあきさ

前大納言為氏郷

あきさあきさあきさ

みれりててててててててててててて

於河法師

みれりてててててててててててて

上古流傳の付句を予が太く集りてありて出づるは
又流傳多句の世に觸る

人皇八十四代順徳院御宇鴨止所記に於て

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

人皇百四代後土御門院御宇御意年才宗祇法師とて

姓ハ飯尾氏とて紀州の人なり予が連宗又此類をて連

織之宗等ハ東下御宇年常縁とて相傳を於の聖州を

累代の宗人なり申院也是類なりお傳りて古今傳

授もとててててててててててててて

あはれりてててててててててててて

~~~~~

宗祇法師より受りてててててててて

とも辨りてあはれ人の御意よりて流傳の百類をて

是ハ流傳連宗の真祖なりとてその吉縁を於連宗より

唯しと加るるとりし了その後天文年中勢州比田の社  
 宮嘉木因守武朝臣もて能譜撰吟る句真りあり此  
 守武朝臣も連家の達人もて宗祇法師もも知るま  
 人まう能譜の句の式いよて定まらるる一六語の宗連  
 周桂いりよと名るまは汝さあよまを用人もあ返りよ  
 中あてこれちしれいよ定あるま句成物せり録真も平  
 韻あり宗祇法師の三箇も句よ録真又十韻ありた  
 ろ之然るハ能譜の句の授も宗祇法師の百韻を繼と  
 るしりるるまも加るまらるるまらるる是世よ西僧守武子句  
 かりしと宗祇法師といふ六州依る本の堂より一六の年の以

是利家よまらるるまらるる三前靴老といひしは後よ難發して  
 清よとまらるる連家を能る能譜を以て守武朝臣もも  
 又通ありし宗祇法師と道遠院と合辨ありて也  
 新撰波系よ能譜辨を能る大撰波系を撰る能譜付合の  
 繼とよ不獨吟三百韻ありかの大撰波系よ宗祇十三回と  
 多向るる能句あり守武守武と世を同じく能るる人ま  
 ありし道遠院と後の周桂を能るはせよまらるる此也  
 ありし道遠院と後の周桂を能るはせよまらるる此也  
 ありし道遠院と後の周桂を能るはせよまらるる此也

内大臣宗隆云

宗隆云とていふことありしなり

宗鑑法師

のまんとうまゝハ、まの法も

房のつらさを知りぬの如く程向を付けしるるより一四記よりえり  
 人皇百八代後陽成院御宇天正年中貞徳といふ人播州言  
 槻の地を永種の子とて入部成さきとも母方ハ和州信太博  
 と松永弾正久秀の一族とて故とて松永苗成と改め松永  
 貞徳といひ系師と出く和宗連とあさまさひ和宗といふ名  
 あつ老後病疾あり七目国とてあつて白坂の熱坂を思盤と  
 あけく延陀丸と長政丸と自童名のふ群を唯義ハ明心最  
 すと号とてけ人生得る義徳人といふをまると弘法大師の流を

好む能事の中をいふも一和宗ハ能事再大納言成道あり右  
 相と申院人成屋より換はるる事ハ細川を自法平九年春  
 下攻山より事ハ連とて大園秀吉との所抱の臨江女館也法  
 橋の門人あり和宗ハ和宗よりいふ所傳ハ連とてあつて和宗  
 いふ事ハ和宗の事得の事とて由也世人といふ事とてあつて  
 たり一故とて世人といふ事とて和宗といふ事とてあつて和宗ハ  
 貞徳より和宗といふ事とて和宗といふ事とてあつて和宗ハ  
 和宗といふ事とて和宗といふ事とてあつて和宗といふ事とて  
 和人皇百九代後水尾院御代をいふ事とて和宗といふ事とて  
 和人皇百九代後水尾院御代をいふ事とて和宗といふ事とて

非論一

とらうし 師 葛 藤 巻 二 巻 終

五月

後水尾院

たつたつたのさうし ながしき ながしき

ながしき ながしき ながしき ながしき

ながしき ながしき ながしき ながしき

ながしき ながしき ながしき ながしき

戊申の月 五月 十日 十日

あつたつたのさうし ながしき ながしき

金 宗 寺 一 行 幸 の 時 因 々 々 々 々 々 々 々 々

早稲中稲 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

後水尾院

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆

〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆 〆





け耐五奈南鳥丸新玉津名由社中下仰一終ふおそまそしとあり  
 台命に依る男淑善と長し実由下回一恩縁をのこ後小再昌院  
 法中位下 叙せし維舟、貞徳と中遠一々里村の門下入る貞室  
 相質与士洛下居る貞徳傳事の流傳より地をたぐりて  
 りれとけ門下折ふ流士あまこたぐりて 人皇百十二代靈元院御宇  
 延宝年中松州大坂小西山宗因 別号一画一名梅翁又西翁とも号す  
又傳小信とて能天徳之宗因とも云 とりて  
 豊後傑の士也と連ふを里村家よりその流傳を宗濫う遠風を  
 慕ふ自らの風流を潤色しとて新ふその後武州小下回一  
 終林軒書意といふ流士乃方小素翁とて大よ新ふ松意軒  
 号より思ひ付佛家の極極の附會しとてこれを世俗終林流傳

とりて武江に一風と流傳を亦松州より大よ新ふ既の後  
 水尾院も貞徳流を折されしとも終林風のそんたりて  
 忍ひりて次々けとせりてや後林の流傳を折りて

後水尾院

あし雲く齒くみ付るあちうけ

あせみそ流流く摘りて何と那

多ふおちく貞徳流の古風を甚る靡く流傳宗因小一孝  
 宗周門人小井系西翁といひる英雄もそく一自ふ二萬三千句獨  
 吟と終林かく善人よ折りて時槐とといひる流士元来伴忍重  
 城と孫堂宗女正殿の所内と松尾甚七爺といひる人より仕官の

録乃ふ嘗雪の光りよ和漢の文そのをよめる風雅よ  
 たりゆりく詠諧よりけり本門をよめる難後一禪悟とけり  
 詠者概をよめるよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 一梅の芭蕉をよめるよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 雨の後林乃と田風よたけりよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 志とく田流をよめるよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 一流をよめるよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 蕉洞の菴なるをよめるよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 梅一東府よ其名をよめるよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 おと後よ芭蕉をよめるよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏

家系を熟讀し詠諧よ眼を付るまをよめるよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 此と奥州の御しと松島を遊するよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 小冊をよめるよ其名をよめるよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 胸腹よ宗因の御しと松島を遊するよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 詠を教訓と芳聖の御しと松島を遊するよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 詠を記さるけり生得致景よ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 心風の詠諧をよめるよ其名をよめるよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 関の宗因の御しと松島を遊するよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏  
 一愛と門人教書の平武の御しと松島を遊するよ其名をよめるよ下向一深川よ若草或踏

板本吹といへる是外男  
 医家より出別号す昔よと云  
 服於嵐雪

姓氏  
之詳  
とくつあせ 蕙華の とならう たぢの ありは せん

草其の こと 楓あり  
門人の こと 角鹿あり

とらふ

あつらひ 楓と さうらう 草の 評

内國に撰く 伯祖葉に せんせいの せんせいの上の 法人の せんせいの 色  
蕙華の 骨肉を せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいのお せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
蕙華の せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

さうらう せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

蕙華 七後の 内より せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

人皇 百十の 代 東の 院の 中より せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

蕙華の せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの  
蕙華の せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

さうらう せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

門人 ありて 後れを 採府より せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

せんせいと せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

採集 せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

せんせい せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

せんせい せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの せんせいの

三十七と平と終身をたの連つた海防相にあつた也(一)其下に三十一  
をたのりつた言ひ入十六七とて感ら如年よりつた言ひのよきつ後世に  
流ると世に意をな十二歳とて言はれ終身海防の職に古物後林を  
よつたてつ海内の人をたの言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひ  
よるも海防の中真子の祖と稱と古く徳家の一人なり其角用四十七  
歳あつて七次甚為の幸なりつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
八歳あつて後と喜ひ古人よと稱つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひ  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた

江戸地

我州江戸の甚為の事貞徳の古物なりつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた  
つた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた言ひつた

かゝれば下り世俗に於ては... 延寧年中... 伊丹流

伊丹流

延寧年中... 伊丹流... 伊丹流

伊丹流... 伊丹流... 伊丹流

小梅翁の心算とていつ日と大のけいけい飛鳥傳の古物よつら  
 八たふまゝ梅翁滅後後林ハも物もさうだつたよつらと付け  
 句と三人蜻蛉時代の意おとつたよつら梅翁の古物よつら見  
 せハ付句又よつら梅翁の物よつら大回もつらよつら  
 とも発句よつら一併起つてよつら梅翁の句よつら梅翁の句よつら

百丸

踊子に宛あつた珠敷よつら梅翁の句よつら梅翁の句よつら

梅翁の心算とていつ日と大のけいけい飛鳥傳の古物よつら  
 八たふまゝ梅翁滅後後林ハも物もさうだつたよつらと付け  
 句と三人蜻蛉時代の意おとつたよつら梅翁の古物よつら見  
 せハ付句又よつら梅翁の物よつら大回もつらよつら

鬼貫

除夜つら鬼社の中眺る量

かく金伴一机流さう伊丹机といふけ鬼社の中眺る量  
 おおつら鬼社老人とめく梅翁を懐るく佳境よつら  
 梅翁の美談を志つてつら梅翁の句よつら梅翁の句よつら  
 涯祇力の高麗筆大徳おねとつら梅翁の句よつら梅翁の句よつら

鬼貫

面心つら鬼社の中眺る量

名月

更しや花を紙も押さのま  
 秋ハきのつ有夜鳥をいつもなき

空乃和尚たるは流傳のいふまゝに

こゝに同のいふ所鬼を答へ曰

庭前よ志ろく咲くは梅の那

接府よ名をたれた方といふ娼妓の

墳きとて

此墳ハ柳さくともあまきさう

三月晦日雨降るま

暮るのりふさうともく降よ乃

こゝ餘ハこゝまゝと畧とて流傳古今往來の宗匠といふと

伴勢流

勢州の流傳ハ開元ハと古天文年中守武より起る守武より

源平一枚田檢校ハ中古より一より中川氏圓友後云

より男乙空後云守武の上代の流傳より一より貞徳流と名を

の初より貞徳の古流圓友の初より慈徳の二流より一より圓

友の男乙空より流傳と勢州の流傳の祖ハ守武かれとも流傳よ

り唱んる世俗伴勢流と号をとり奉けて中より流傳と名を

麦畑の中よ蕃をとりてい川麦林舎と号を圓之後世麦林と一

名よりとてと流傳今よいふ勢州ハ悉く麦林の流傳を

ある人間守武より一より一より元七八十年より及へけるの流傳



まく天下秘きこと秘傳さるはしきと云ふ人の説くは  
 よしつ慶長の初より元年中よむ天下秘傳さる  
 寛永年中再び秘傳さるはしきと云ふは  
勢州久麻郡 任口 後世に依て守り  
 秘傳執らるるは伏見任口より同名別人さるはしきと云ふは  
 吟男秘傳は任口より秘傳さるはしきと云ふは  
 久麻の百六十員と云ふは守り秘傳さるはしきと云ふは  
伴州と野洲の 御内の人と云ふは  
殿守と采女と云ふ 秘傳さるはしきと云ふは  
 秘傳さるはしきと云ふは

秘傳のしきと云ふは

秘傳のしきと云ふは

歳暮

くは秘傳のしきと云ふは

加松の秀吉も折くは秘傳のしきと云ふは  
 秘傳のしきと云ふは  
 秘傳のしきと云ふは  
 秘傳のしきと云ふは

秘傳

秘傳のしきと云ふは

秘傳のしきと云ふは

秘傳のしきと云ふは



一 遠とてとて東のより久かむ  
名月や掛けはもろく 風並に  
つとまらむとらり〜とらり〜のまね

流附向の道守引の續子論葛松系なるへまきまありん  
流東雙林寺の河ぬり屋敷の古境に歸る梅花佛とま  
ま流しまるとまるとけま老の事之を流流の門徒同士のま  
染る備の物持たまを穉成英雄とま老の跡あり一流徒  
國の滅とま

中時菴流

中時菴流の流にけり系師の流り西の流り流り流り流り流り

南林下河系菴水のまの寓居に聖年歳思

宿のまの寓居に聖年歳思

石ころや祇野流る夜のも

け夏向を始り〜追日佳句を味〜初ま夏向の心あま

と出来し行ふまより初下の俗人ハいよよおよと林を町内書り

風新ふ志ふる中にも俳諧を六の之法を師となせりまねまに

お〜五橋所代官 素風所代官 石系流る夜 とも斗門の人〜ま〜

〜とま〜俳諧おま〜官〜とま〜俳諧長者〜とま〜ハ

官家へ俳諧許なら〜ハけなまを業と〜と〜免許の上

ま〜花押さ〜ハ〜也保あ〜今〜流〜け例れ續と追

と能く善く入る門人ありてあるは沖の橋本半秋 後松本苗山氏

人能く善く入る者ありてありてあるは其の角也 其の角也

若くは其の角と能く善く入る者ありてあるは其の角也 其の角也

大坂の角と能く善く入る者ありてあるは其の角也 其の角也

再入る者ありてあるは其の角也 其の角也

紀州新原氏 鳥林 紀州新原氏 南里 紀州新原氏 志水甲斐守殿 三浦吉門守殿 安藤常刀殿 とありてあるは其の角也

國の成敗沖と能く善く入る者ありてあるは其の角也 其の角也

とありてあるは其の角也 其の角也

の谷向より能く善く入る者ありてあるは其の角也 其の角也

又一能く善く入る者ありてあるは其の角也 其の角也

流と能く善く入る者ありてあるは其の角也 其の角也

り車輪のころと能く善く入る者ありてあるは其の角也 其の角也

のころと能く善く入る者ありてあるは其の角也 其の角也

ありてあるは其の角也 其の角也

は其の角也 其の角也

と能く善く入る者ありてあるは其の角也 其の角也

蛙牙高野人

物と能く善く入る者ありてあるは其の角也 其の角也

歳旦

初日孰るれあはせりてのたま

加く一説をたるとして又は時著よりあふ故人と成  
愚より心も一れもあはせりてのたま六の角東の院  
即射の社中子位に射の品を

誦論中の一説



